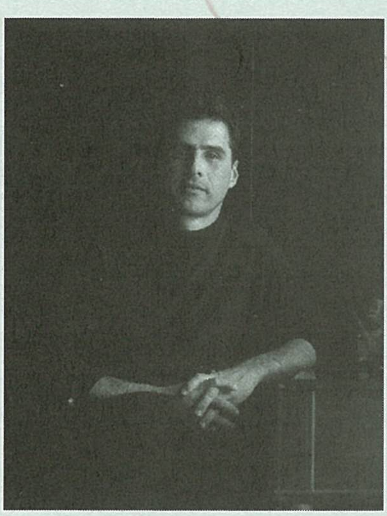
2006／夏
季刊　福井県和紙工業協同組合

和紙だより

―越前和紙への提言―



■ジェフリー　ムーサス　Geoffry Moussas
建築家。1993年、マサチューセッツ工科大学（MIT）大学院建築学科修士課程卒。東京にて早稲田大学助講師、谷口吉生、槇文彦などの設計事務所勤務を経て、京都の中村外二工務店で日本の伝統建築を学び、修行。2002年京都三条通近くにDesign 1 st設立。京町屋や数寄屋の改修工事等を多く手掛ける。人気テレビ番組「Before & After」に出演。設計業務の他、現在京都大学、関西大学非常勤講師。

■ジェフリー　ムーサスさん（建築家）
「日本の伝統建築や素材にもっと誇りを」

●伝統建築にもっと自信を持って

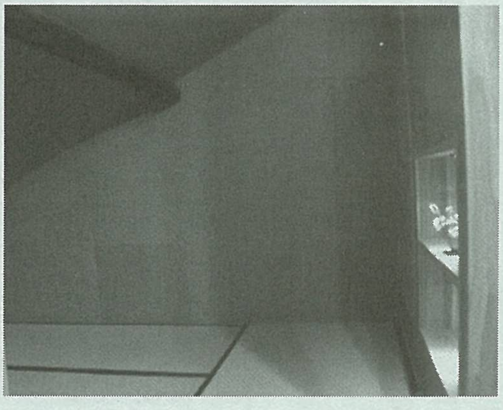
私は世界中の建築を見て回りましたが、日本ほど自国の建築に対して誇りを持っていないところはないように感じます。戦後、また最近ではバブル時期がそうだったからかもしれませんが、全部西洋のものがいいという風に思ってしまって、京都を見ても伝統的な建築が次々と町中から消えていき、マンションや新建材で作られた住宅が増えました。

木や土壁、たたみ、和紙でできた日本の伝統建築はリサイクルが可能で環境負荷が少なく、汚染物質などを吸収してくれる。又一二〇〇年の歴史が培った、自然を取り入れ精神的な間を演出するなどスローライフ的な建築美学も持っている、二一世紀にふさわしい建築なのです。今、どこの国に行っても自国の建築というのは大切にされ、人々は実際建てるのは少々モダンなものであっても、伝統建築というのは一種の憧れなのです。日本で元々使われていた建築素材は、戦後海外から入ってきたコンクリートやガラス、アルミなどに比べて貧相な素材と考えられたということも聞いていますが、そんなことはない。これは一番問題です。もっと誇りを持つべきです。

●天井や壁に和紙を

私の手掛ける建築では、特に天井や壁に和紙を多く用います。天井は日常触ることがないので埃や汚れがたまらず和紙も長持ちします。値段の関係で機械漉きのものをよく使っています。特別な紙張りの職人さんがいなくても、現場でクロス屋さんに張り方をちょっと教えれば案外簡単に張れるものです。菊判の和紙の大きさを無駄なく使う計算の仕方や、みみを活かした張り方など教えています。

白い和紙も好きですが、アクセント的にベンガラや藍の紙を張って空間に高級感を出したり、アートのような雰囲気も出せます。私が現代建築を作るとしたら、勿論ビニールクロスは使わないと思いますが、重ね張りをするような使い方でなく、ぴっちりとした直線的な処理の和紙を使うでしょうね。

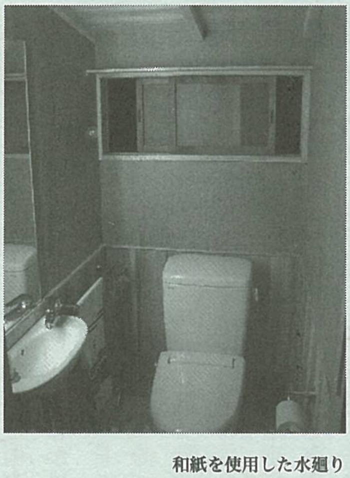


天井と壁に和紙を使用した室内

現代建築を作っても今は殆ど自然素材で作ることはできます。コンクリートやガラスでできた冷たい空間に、和紙を使うことで、日本人のDNAに刻み込まれているほっと安らぐ感覚を作ることができます。襖は特殊な技術がいりますが、壁や天井でしたら、そんなに特殊な技術がいらないので、もっと使うことができるはずです。また他の伝統素材、例えば畳より和紙の方がずっとプロモーションしやすいですね。畳の生活は現代のライフスタイルに合わない家があってちょっと・・という家でも、和紙の天井や壁はそんなに影響ないですから。

●建築の装飾としての和紙

日本建築は世界の伝統建築の中では最もシンプルで、それが世界中で好まれている理由だと思います。普通、世界の伝統建築は豪華な装飾を競っていますが、日本は床の間や一部の襖にだけ装飾要素を配し、そこが私にとっても魅力です。お寺やお金持ちの家などの一ヶ所くらいに、装飾的な和紙の使い方を私なりに一度考えてみたいです。そういう場合には職人さんも特別な技術がいりますし、高いですよね。



和紙を使用した水廻り

● 建築に和紙を使ってもらうには

一番重要なのは、先程も言いましたがお客さんに、和紙を始めとする日本の自然素材のものがどんなにいいかをまず知ってもらうことだと思います。

工務店は、扱いが簡単な新建材やクロスを好んで和紙をどうしても使いたがりませんが、お客さんがいい、これを使ってくれと言えば使うようになると思います。設計屋さんも教えることができると思いますが、営業の人が一般の人に教える方策を考えてみるのもいいでしょう。

例えば京都なら、あるコミュニティ向けに見学会やワークショップのようなものを開いて見せるとか、グラスルーツ（草の根）的な宣伝でもいいですよね。竹炭などの炭の効用はだいぶ一般に浸透したでしょう。そのような方法でビニールクロスから和紙に変えさせる戦略を環境団体などと組み立ててみたらどうでしょう。

それと土地より知恵の詰まった家の方に価値があるのだという基本的な「建物感」を変えることでしょうね。日本では価値のあるのは土地だけですから。そうでないといつまでもスクラップアンドビルドで建築廃棄物も多く、その面では日本は遅れています。

ムーサスさんの町中のアトリエは、築八十五年の町屋を五年間かけて、自分で少しずつ改修したものだ。坪庭には静謐な時間が流れていた。

■京都伝統工芸専門学校　京都府南丹町
国内初の「和紙工芸科」新設

黒谷和紙協同組合理事長、福田清さん

京都伝統工芸専門学校（通称TASK-Traditional Arts School of Kyoto）は、一九九五年に経済産業省の支援の元、第三セクター方式で京都府園部町に伝統工芸の後継者育成のために設立され、今年一二年目を迎える。

いわゆるカルチャースクールのように趣味として工芸を教えるのではなく、伝統工芸の本場・京都圏で活躍するプロが実習を通じて指導する職人の養成学校である。一学年五百人という学生の出身地は北海道から沖縄まで十八～六十歳と幅広いが、職人さんの二世は少ない。昨年までの陶芸、仏像彫刻、蒔絵、木工芸、金属工芸、漆工芸、竹工芸、石工芸、京人形の科に加えて、平成一八年年度から「和紙工芸科」が新設された。

ここの特長は、ハイレベルな実習にある。講師陣には京都迎賓館の数々の名品を手掛けた職人も多く、日本の伝統工芸集積地、京都をアピールしている。実習設備も充実しており、例えば陶芸科ではろくろを二〇〇台完備。絵巻などに出てくる日本の伝統的な職人の労働姿勢、座位を取るために畳敷きの教室もある。

ろくろの並ぶ陶芸コースの実習室

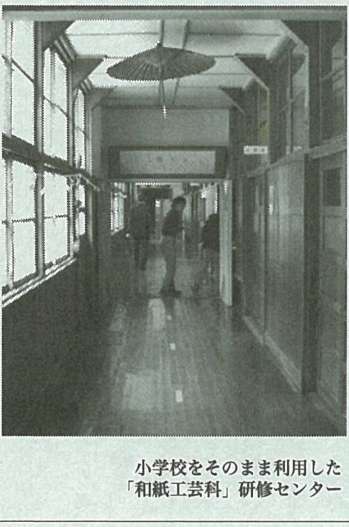
卒業作品は、イタリア、ロンバルディア州で年一回行われる工芸展「MIA展」に出品され、希望者は当地の職人と交流できる研修旅行にも参加できる。また、附属施設「京都伝統工芸館」（京都中心部烏丸三条）では、学生作品の常設展示をメインに、その感性を発信し、表現者としての交流の場を提供。ステップアップを図る若き職人たちを全面的にバックアップしている。

和紙工芸科の紙漉き工房は、本校（園部町）から車で一時間ほどの綾部市の山間、黒谷の「和紙工芸研修センター」にある。廃校になった小学校跡地を利用した工房で、和紙工芸科主任講師の黒谷和紙協同組合理事長、福田清さんにこの学科へ思いを伺う。

●「和紙工芸科」誕生のいきさつ

全国和紙連合会等の会合で、和紙技術を教え、後継者を育てる学校がどこかに欲しいという話は、随分以前からあったのです。黒谷の和紙は戦後からずっと六〇年ほど、農協の中の一事業部で、黒谷和紙協同組合として独立したのは、十年前です。平成八年に法人化し「黒谷和紙協同組合」を作りました。それまでにも細々とではありますが、毎年研修生を受け入れて二年間の技術研修制度を行っていました。

その後、もっときちんとした後継者育成事業を市に相談していたところ、廃校になる小学校があるので、黒谷和紙で利用してくれないかと一昨年話があったのです。たまたま綾部市長とTASKの理事長が視察旅行でご一緒になり、にわかに「和紙工芸科」の話が進みました。その小学校跡地を、TASKの分校というのではなく、研修センターという名目で設置し、授業もやるが、今まで通り黒谷の研修制度も引き続き行う。また、今まで黒谷で十年間技術を習得してきた人を今度は学校の講師として迎えようという筋書きができました。話はとんとん拍子に進み、すぐに開講の調印式となったわけです。


小学校をそのまま利用した「和紙工芸科」研修センター

●**学生、講師と一緒に勉強しよう**

本年度初めて生徒募集をし、六人の生徒さんが学び始めたところです。出身地は、埼玉、鹿児島、大阪、千葉、京都で、他の科を終え移ってきた人もいます。若い講師二人は、紙漉の基礎を、より専門的な技術は私が自ら教えます。いわゆる講義は、私の担当で、本校舎で他の科の生徒さんと合同で行います。千五百年昔からの和紙の歴史、文化、現在の課題、京都らしさ、京都ブランドとは何か？デザイナーや問屋さんと和紙産業や文化について研究し合う態度の重要性などを話しています。

実習室で和紙を漉く生徒達

私達の若い頃は、紙を漉くだけで、この紙がどこへ行くのか、何に使われるのか分からない状態で紙をひたすら漉いていました。今の生徒さんには自分の将来の青写真を描きながら学んで下さいと言っています。和紙の技術屋になるのか、店を構えるのか、紙屋を商いながら体験コーナー等もやるのか、外国へ行くのか、作家になるのか、とにかく二年間の内に自分で決めて下さいと。紙を作った以上は売れなければなりませんし、伝統産業の現状は厳しいですね。お客さんを引きつけるような魅力のあるものを出していくことが大切で、和紙だけでなく、竹や木との組み合わせなども学校で学べるわけですから、他業種交流的な事も大いに挑戦しなさいと言ってあります。といっても何しろ講師も初めての経験ですから、お互いに試行錯誤しながら一緒に考えていきましょうという姿勢が基本ですかね。

●**カリキュラム**

学校の工房が来るまでに、この小学校を研修センターにどう使ったらよいか随分考えました。昔給食室だった所は、原料を煮たり混ぜたりする紙料作りの部屋。理科実験室を漉き場、職員室は黒谷和紙の展示と販売コーナー、二階の教室は全国各地の和紙展示室にし、生徒さんにも又黒谷和紙に触れてみたい人にも興味が持てるように知恵を絞りました。

実習一年目は楮の育て方から、原料作り（煮る・打つ・解く）を始め、染めや晒の工程。基本の紙漉や透かし入り等のバリエーション漉き。二年目はもみ・しぼり、大型紙作り、切る・張る・織る・綴る等の加工技術、卒業制作に向けて他素材との組み合わせや工芸色を出した創作和紙などに取り組みます。

紙漉実習は、生徒は年間五〇〇時間。従来黒谷で受け入れていた研修生は九〇〇時間でしたので、これでも少ないのです。足りない時間を自分で努力するよう指導しています。

黒谷和紙の起源は定かではないが、一説によると平家の落人が始めたという。近くを流れるいさず川の度重なる氾濫で歴史を示す文献が残っていないそうだ。江戸時代になって、黒谷は京都を味方に付けた。ある代官が、京都の着物産業に必要な紙を漉いて欲しいと所望し、呉服の多当紙や包装紙などを供給し始めた。紙の種類が豊富なのも黒谷の特長。薄い、厚い、どんな紙でも漉ける。昭和三〇～四〇年頃は厳しかったが、「製品加工部」を設置して和紙小物などの加工品を開発。この試みが京都ブランドとも相まって黒谷和紙の知名度アップに繋がった。素朴な味わいで、和紙らしさを大切にした商品だが、昨今では和紙に情報を付け加えないとお客さんも満足しないという。戦後五〇軒あった漉き場は、現在三、四軒だが、全て確定注文生産でフル稼働。小さな山間の産地は善戦している。

「製品加工部」で開発された和紙小物

■微生物利用で和紙排水浄化の試み始まる

北陸EM普及協会　主任研究員　中野さん

和紙は環境に優しい素材だといわれるが、その生産過程では、楮や三椏などの原料加工時にでる廃棄物や紙を漂白する為の薬品を処理したものなどが使用した水とともに排出される。和紙産地では、漉き場で各々溶け出した和紙繊維をフィルターにかけ除去したり、川底のヘドロの浚渫（しゅんせつ）処理を行っているところもある。

近年環境意識の高まりと共に、この和紙生産の際に生じる排水をEMと呼ばれる有用微生物群によって浄化する試みが福井県和紙工業協同組合と北陸EM普及協会との共同で始まった。「EM普及協会」は全国に十一程あるEMの普及の団体で、お話をお伺いした中野主任研究員は北陸支部の方である。

●**EMとは？**

EM（有用微生物群 -Effective Microorganisms）は特別な新しい菌の名称ではな

く、自然に存在する微生物のうち人間に対して有用な働きをする光合成細菌、乳酸菌などの善玉菌を集めたものの総称である。

EMは今から約三十年前、沖縄の琉球大学の比嘉照夫教授によって研究開発された。いわゆるバイオテクノロジーのような人工的なものではなく、味噌やお酒、チーズなどの発酵に利用される元々自然界に存在する微生物を利用した技術である。EMは様々な分野に活用可能で、肥料や土壌改良、畜産、生ゴミの処理、水質改善など、主に有機農業の分野で活用されてきた。

今立でも「今立有機農業研究会」という有機農業を考えるグループが、積極的にEMを活用してきた。しかし、当地の農作地は山あいにある紙漉き場から流れる水を使用しており、いくら田畑で有機農業を行っても、そこで使用される水がきれいでなければ意味がない。三年ほど前に組合、農業グループ、北陸EM普及協会の三者での水質浄化の取り組みが始まったが、二〇〇四年の福井豪雨の水害でプロジェクトが一時中断。今年度より再度挑戦の運びとなった。

● 地元と一体となった取り組み

進め方は地域ぐるみの環境取組事業として、試験を重ねながら着実に効果を上げる仕組みを考えた。まず、地域の小学校のプールにEMを投入し、水質改善効果を測定する。結果が良好であれば今後小学校で継続的にEMを培養し、そこから各漉き場にEMを配布して排水の浄化をする予定だ。地元の岡本小学校をはじめ、六校ほどが環境教育の一環として名乗りをあげ、この取組に協力している。

プールにEMを投入する小学生達

生徒の協力でEMを培養し、冬場に水を溜めている学校のプールに投入して効果を計測するのだ。四月中旬にEMを投入した岡本小学校では、当初水が汚れて底が見えない状態であったのが、四月末にはプールの底が見えるほどに浄化されていた。また、昨年協力した南越中学校ではプール開きのための掃除がかなり楽になったとのこと。

現在も和紙組合と綿密な話し合いを行っている。「河川の浄化は継続して続けないと意味のない活動です。我々は単に便利な資材を提供する協会ということではなく、小学校などを巻き込んで地域ぐるみで継続的に環境改善に取り組んでいける仕組みを構築したいと考えています。」と中野さんは語った。

情報欄

● イベント情報

■ 福井県伝統工芸士会連合会展

時：2006年7月27日～8月8日
場所：池袋 全国伝統工芸品センター

■ 越前和紙の里「紙の文化博物館」オープン

平成18年4月29日、越前和紙の里に「紙の文化博物館」がオープンしました。世界最大の手漉き和紙「平成大紙」をはじめ、現在生産されている様々な越前和紙、散逸が危惧される貴重な和紙道具、「2000年紀和紙総監」の編纂にあたり蒐集された全国の和紙の原紙1000点などを収蔵展示しました。
建物は、太い柱と梁で構成し、天井を高くすることで大きな作品等を展示でき、材料の木材はすべて県産材を使用。和紙の収蔵に越前指物組合製作の桐の保管庫を導入するなど、地域産業の振興にも配慮しています。今後、様々な企画展を開催し、和紙文化の拠点としていくつもりですのでご期待ください。

編集後記

本号より越前以外の和紙産地にもお邪魔して、お話をおうかがいする企画をはじめました。和紙業界は産地がそれぞれ競い合い切磋琢磨することで発展してきました。現代ではお互いの情報交換を活発にすることにより、需要喚起を業界全体でもり上げていくことが可能ではないでしょうか？（ほ）

季刊・和紙だより　第11号（2006年夏号）　発行日：2006年7月3日
※無断での転写・転載はお断りいたします。
発行人：福井県和紙工業協同組合　山田益弘　住所：福井県越前市大滝町11-11　TEL：0778-43-0875　FAX：0778-43-1142
編集人：右衛門佐美佐子事務所　右衛門佐美佐子・北條崇　編集所：〒606-8225　京都市左京区田中門前町90　TEL：075-712-8834　FAX：075-702-6223